
暗証番号、忘れました！

輝きのブライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗証番号、忘れました！

【Nコード】

N6138Z

【作者名】

輝きのブライト

【あらすじ】

『竜殺し』と呼ばれた、ザイフリートが終焉を呼ぶ竜、クログナールを切り裂いた日から4900年。

世界は五つの地域に分かれ、それぞれが巨大国家を築いていた。学校に入るにしろ、会社に入社するにしろ。

最初に見られるのは、こんにち、誰もが有する潜在能力、パスワード「暗証番号」。

『魔法』、ウィーズ『身体強化』、アップバード『自然』と三種類ある異能力。

能力のカテゴリズにより、身分が決まってしまう社会において、

『魔法』^{ウィーズ}に覚醒できるかどうかが重要視されている。
学園全体の9割が『魔法』^{ウィーズ}使い。
その中の一割である、鳥不無元親は^{とすなしもとちか}そもそも、能力を所有すらして
いなかった！？
輪廻転生と異能力と身分制度そして、学園ライフ。
そんな世界をぶっ壊せ！

一枚目：プロローグ

遙か昔ヒンダルフィア城

満月が妖しく輝く、ある日ある夜。

真つ黒な半袖のコートが特徴の少し長めの紫色の髪を持ち、左耳に妙な形のピアスをして眼帯をした隻眼の賞金首・『隻眼のザリット』と呼ばれる、奇妙な腕輪をした青年が何も怪我を負っていない唯一見える残された左目を閉じて城のバルコニーの手摺に凭れていた。

「ザリット、来ているのか？」

「誰だオメーは？・・・ああ、ヒルダか」

ザリットが声をするほうを向くと、隣には真つ白な長髪を持つ、どこか気品溢れる女が立っていた。

ブリュンヒルデ・ヒンダルフィア。

ヒンダルフィア王国の第66代目の王位継承者である。

そして、『竜殺しのザリット』と呼ばれ、懸賞金66億をかけられているザリットの数少ない知り合いの一人であり、そして

恋愛関係にある。

当然、誰も賞金首と女王が密会していることを知らない。

「なんたはないだろう？・・・ホント、姿を消したりするのだけは病的に上手いな。」

「馬鹿言ってんじゃない。それじゃ、俺が馬鹿みたいじゃん」

少々長い犬歯をむき出しにして、反論してみせるザリット。

ヒルダはそんな様子ですら愛おしいと言わんばかりに、自分より身

長の高いザリットの手を握る。

「・・・なんだ、自覚あるのか？」

イタズラ
悪戯っぽく笑って見せると、

「舐めてんのか？それでも、自分のことは知っているつもりだ」

と、ザリットが不服そうに返した言葉を聞き、ヒルダは満面の笑みを浮かべた。

「まあ、自覚があるだけなによりマシだがな。ザリットはそうでないと、戦乙女^{ヴァルキリー}なんて呼ばれた名が廃^{すた}るな」

「お、俺をヴァルハラに連れて行くのかよ！？」

焦るザリットを見て、ヒルダは上目遣いでザリットを見上げる。
どこか、小悪魔な表情で。

「誰がそんなことすると思っている？海竜王^{リウアイアサン}、炎竜王^{バハムート}から助けられた、愛^{いと}しの竜殺^{ドラズレイヤ}しに」

「・・・全部、冗談だというのか？」

「そんなところだ。いい加減、気づいたらどうだ？」

そして、ヒルダはザリットを強く抱きしめた。
まるで、消えそうな幻影^{げんえい}をかき集めようとするかのように。

「・・・今度はいつ、来てくれるんだ？」
「いつでも。」

即行でケロリとした表情で答えるザリットに少々困惑した表情を浮かべつつ、ヒルダは少しだけ頬を紅潮させた。
逆に生活費はどう稼いでいるのだろう、と疑問が生じて仕方が無かったが。

それでも、ヒルダは嬉しかった。
そして、誓う。

たとえ、世界を敵に回してもザリットだけは裏切らない。

そんな風にヒルダが考えているのを知っているのか知らないのか、ザリットはこっぴどく額を当てる。

「だーいじょぶだって。俺は超絶無敵天下無双のザイフリート様だから！」

胸を張るザリットを見て、微かに涙を浮かべつつ、ヒルダは愛しの賞金首に告げる。

「・・・馬鹿ザリットのくせに、身の程を知れ」

10年前

ある公園で。

そこで二人の子供が遊んでいた。

一人の少年は黒曜石こくようせきのように黒い髪とルビーのような瞳を持っていて、一人の少女は太陽に輝く、西洋人形せいようにんぎょうのような金色の髪と眼くらも眩みくらそうな金色の瞳を持っている。

容姿を除けば、仲の良い二人が遊んでいるようにしか見えないだろう。

だが、少年の左手首から肩まで伸びる、黒と赤だけを用いて、描いた模様がある手袋てぶくろ。

あどけなさの残る、その顔には似合わない長めの手袋。

それだけを見ると、第三者は『何故、手袋をしているんだらう?』

と怪しんで怪訝そうに目を向けるだけで近寄ることはしないだらう。しかし、金髪の少女は違った。

少年が左手首から肩まで伸びている手袋をしていても疑問に持つことは無く、こうして遊んでいる。

「もとちかくん、知ってる?」

「何を?」

「クログーナーラだよ」

「なにそれ?」

「あはは、知らないんだねー。せんかくひさいにもほどがあるなあ。クログーナーラってのは・・・」

黒髪赤眼の少年　もとちかは知らないのかよ、と苦笑した。

しかし、その直後だった。

金髪長髪で金色の目を持つ少女　ちさきは愉快そうに笑い、ジヤングルジムが一番上に上がった。

もとちかは「横暴だよねえ、ちさきちゃんは。」とボソリと呟く。周囲から「地獄耳」と呼ばれる、ちさきには聞き取れてしまった。

バシッ！

「あはは、手がすべっちゃったなあ。もっちーが悪いんだよ？残念だよねー、ホント。もっちーが知らないんだろーなー、というぜんでいで話してあげようとおもってたのに。」

「いや、実はして・・・」

バシッ！！バシッ！

もとちかが次の言葉を紡ぐより先に、ちさきの手が出ていた。

もとちかには何が起きたか分からなかった。

ただ一つ分かるとすれば、ちさきが怒っているというのだけが分かった。

「あの、、、ちさきちゃん？」

「なに？馬鹿もっちー」

先ほどから使用される呼称・『もっちー』。

主に、ちさきが機嫌がよかったり機嫌が悪かったりする時にちさきを使用する。

ちさきの感情の変化（というか、周囲の人間の感情変化そのもの）を読み取るのがもとちかにとっては苦手な為、どうすればいいか分からず、行ったり来たりを繰り返していた。

行ったり来たりを繰り返していると、ちさきはジャングルジムから降りてきた。

降りてきたとき、ちさきは手を後ろで組んで、見事な装飾そつじやくが施された腕輪うでわを隠し持っていた。

「・・・もっちー。」

「なに？ちさきちゃん」

「ゆるしてほしい？」

「というか、クログ＝ナーラの話がしたい」

バシッ！ゲシゲシッ！

ちさきは顔を真つ赤にしてもとちかを殴っていた。

今度は回し蹴りと裏拳で。

どうやら、もとかかの鳩尾にクリティカルヒットしたらしく、もとちかは鳩尾を押さえていた。

「い、痛いよ、ちさきちゃん！いくらなんでも、まわしげりとうらけんはないよ！」

「わかってないね、もっちー。違うよ、これは・・・あいじょうひようげんだよ」

「え？ちさきちゃん、なんて？」

ちさきがボソリと呟いたのに、もとかかは気付かなかった。

ちさきはじれったそうに頭を掻きまわると、ちさきはそっぽを向きながら見事な装飾が施された、腕輪を差し出した。

「ちさきちゃん、コレなに？」

「呪いの腕輪。」

「はい？」

「まあ、もっちーは知らなくて良いか。」

「そんなこと言われると、かなりはらたつよ！？」

「・・・いるの？要らないの？」

「・・・要ります」

もどちかはちさきの手の中にある、見事な装飾が施された腕輪、ベルングいの腕輪を受け取り、試しに右手首につけてみる。
呪ニ

「へえ、にあってるじゃない。まるで、どれいみたいね。」

「ほめられてるのか、わかんないよ・・・」

「ほめてるのよ、もっちー」

コロコロと笑う、ちさきを見てもどちかはただただ苦笑するだけだった。

ヴァルハあんばんせいぎょがくえん
春原暗番制御学園市

いりよう左目に医療用眼帯をつけた、紫色の髪と左手にしている赤黒い手袋が特徴的な鳥不無元親は追っ手を逃れるべく、街中を走っていた。

ヴァルハラ「クソッ、なんでアイツら、春原の敷地内から出て来ない、追いかけてくるんだよ・・・！」

鳥不無の追手。

それは

「・・・待て待てッ！不要アクセサリー持込み、制服着崩し等の咎で、ルラチナ高等部一年で自然系の鳥不無元親、お前を春原暗番制御学園風紀委員会委員長、いんかい鷺橋八汰の名の下に貴様を捕獲し、委員長に褒めて貰いたい次第である！」

追手。

それは、春原暗番制御学園の風紀委員会の男衆である。

妖艶な雰囲気を持つ、委員長・とひはしヤタ 鳶橋八汰。

その権限は生徒会長をも超えるとされ、敷地が日本の関東地方と同等のヴァルハラで『ヴァルハラで絶対に敵に回してはいけない生徒』の一人とされ、『ヴァルハラ三大美女』の一人でもある。

『パスワード暗証番号』と呼ばれる、個人によって潜在能力が基本的に違う、社会において如何に^{いか}希少価値のある能力に目覚めるか？』

それが、ヴァルハラこと^{いのつ}異能制御方法習得学園の目標であり校訓でもある。

ヴァルハラは五大地域の^{フロンティア}巨大国家の中の制御学園の中で、主に『^{ツバード}身体強化』、『^{ウィーズ}魔法』、『^{ルラチナ}自然系』の三種類ある^{パスワード}暗証番号の一つ、『^{ウィーズ}魔法』使いを育てることに力を入れている。

ヴァルハラにおいて、『^{ウィーズ}魔法』に目覚めたものは^{ひいき}贖罪され、逆に『^{アッバード}身体強化』や『^{ルラチナ}自然系』に目覚めた生徒に対する風当たりが悪い。

しかも、『^{ウィーズ}魔法』に目覚めるのはほんの一握り（教師含む）ため、『^{ウィーズ}魔法』使いのみが国を治めたり出来るため、かつて『きぞく』と呼ばれた身分となり、『^{パスワード}暗証番号』の系統によって、一種の身分差別が出来上がっている。

そして、ヴァルハラには全体の9割が『^{ウィーズ}魔法』に目覚めている。

つまり、その教師陣からの風当たりが悪く、その残り一割が風紀委員会に追われている、鳥不無なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6138z/>

暗証番号、忘れました！

2011年12月20日17時52分発行